

授業研究

問題の提起・社会科

自ら問い直し続ける学習主体を育成する

初等社会科授業づくり

—— 6年「子ども向け平和学習展示を考えよう」を事例に ——

広島大学附属小学校教諭 野元祥太郎



一 問題の所在

予測困難な社会と言われるように、わたしたちのまわりにはたくさんの正解がない社会問題が存在する。そして、それに関わる多様な立場・見解が存在するため、理解し合い、解決することは容易ではない。問い続ける・考え続けることが必要な社会問題が数多く存在するのが現代社会だと言える。本校ではこのような社会状況における教育の在り方について「(他者)」を楽しみ続ける子どもへの育成(以下、他者研究)という主題のもと研究を進め、令和七年度からは新しい研究主題へ移行する。研究の導入として、まず他者研究の課題に目を向けた。

その課題を表すキーワードが「自ら」という点である。これまで、自分にとって異質で解決しがたい社会問題であっても、肯定的に捉え向き合う姿を目指してきたが、子どもが「自ら」向き合おうとする態度を十分に育てることはできなかった。また、様々な社会問題について安易に答えを出すのではなく、問い続ける・考え続けることを目指し、子どもにとっては見えづらい立場や視点を取り上げたり、多様な立場・意見が対立する論争問題を設定したりしてきた。しかし、これも子どもが「自ら」必要とし要求したり行動に移したりする姿には至っていない。以上を踏まえ、本稿では、子どもが社会について「自ら」問い直し続ける学習主体として育つことを目指した社会

科授業について検討し、実践をもとに述べる。

二 「自ら」問い直し続ける子どもを育成する視点

自ら問い直し続ける営みは、改めてわたしたちにとって(大人にとっても)困難で苦痛なものである。庄井(2021)は、見えない世界に向けて探索・探究を(おぼえずと)始めるそのきっかけは「他者に受け容れられること」だと述べる。教師がその他者であるとともに、社会問題にも向き合う仲間集団に支えられることが重要なのである。この点を踏まえ、「自ら」問い直し続ける子どもの育成を目指す社会科の単元・授業構成の視点について、学習に臨む子ども「集団」に着目して検討を進めることが重要だと考えた。以下に三点整理する。

視点① 構築主義的な社会観の形成

金(2025)は、他者研究が目指す子どもの育成にあたって配慮すべき事柄を次のように述べている。

二つ目は構築主義認識論の共有である。世界に対する完全なる理解があると考えられる子どもには、他者との出会いが不愉快な経験として感じられるかもしれない。しかし、世界に対する完全なる理解が存在

しないことに対する合意がとれていれば、他者との出会いは自分の経験を完全なるものに近づける学びの機会として位置付けられる。異質な他者とともに理解を構築・解体する過程を楽しむためには、構築主義認識論を子どもと共有する必要がある。

(金(2025) pp.68・69)

わたしたちが理解・説明しようとする社会とは、自分には見えていない部分があり、単純化された因果関係のもとで成り立つものではない。いつも自分のもつ社会の見方・考え方には偏りや不完全さがあることを認めることが、問い直す必要性を生む。そのためには、自分の見方・考え方を再考する必然性を生むような工夫が求められる。そのために、立場や意見が対立するような論争問題のもと集団で議論・対話の場の設定、考えの相違・自分の考えの位置付けが明確化するような教師のファシリテート・板書構成が求められる。

視点② 心理的安全性を基盤とした学習集団づくり

庄井(2021)が先述したように、心理的安全性に基づく仲間関係に支えられて見えないものに向かう探究が始まる。また、熊井(2025)は、子ども自身が自